

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：17501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13941

研究課題名(和文) 治療経験のないスタッフでも実施可能なアルコール依存の治療プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of the user friendly treatment program for alcohol addiction

研究代表者

岩野 卓 (Iwano, Suguru)

大分大学・福祉健康科学部・講師

研究者番号：30782453

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：アルコール依存症の標準的な治療プログラムを開発し、その有効性評価と、ユーザビリティについて検討した。治療プログラムは、国内外の依存症治療プログラムを基に独自に開発し、全10回のプログラムと使用するワークブックを開発した。同時に、本プログラムは依存症治療の経験が少ない医療スタッフでも利用できるかどうかを、依存症治療の専門家と依存症治療の経験がない医療スタッフに確認してもらい、ユーザビリティを検討した。結果として、ユーザビリティは高く、治療効果も国内の標準治療と同等であることが示された。また、参加したスタッフは依存症に対する態度が良くなることも示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学会発表および学術論文として情報発信を行い、所属機関のある県下において民間・公的機関にて講演会を行った。また、研究者自身のホームページに情報を公開し、対人援助職を養成する大学の講義にて、研究成果の一部を紹介した。依存症は治療期間が少ないことが日本の問題として注目されており、そのような状況で専門家以外が治療を担えるプログラムが開発されたことは、治療のハードルを下げるために非常に有用であると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Developed a standard treatment program for alcoholism. Then, I evaluated effectiveness and usability. There were a total of 10 times programs and a workbook was developed. Since this program is used by medical staff who have poor experience in addiction treatment, usability was evaluated by specialists in addiction treatment and medical staff who have no experience in addiction treatment. As a result of the study, the program has high usability, and the treatment effect is the same as the standard treatment in Japan. In addition, it was shown that the staff who participated had a better attitude toward addiction.

研究分野：臨床心理学

キーワード：アディクション 認知行動療法 プログラム開発 治療スタッフ 心理学的介入

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本におけるアルコール依存は 109 万人と推計されており、うつ病や自殺に影響する問題である。依存症者は健常者よりも平均寿命が 10 年前後短く、身体疾患の併存率が高いことから、適切な治療が必要である。しかし、専門の治療機関が少なく、治療経験のあるスタッフも限られている。さらに、アルコール依存症者は治療からの脱落率や再飲酒率が高いため、医療スタッフから陰性感情を持たれやすく、未治療のまま重症化する事例も多い。

適切な治療の提供には、エビデンスがあり医療スタッフにとって使いやすい治療プログラムは有効である。特に、覚醒剤を中心とする薬物依存においては、治療プログラムの開発と普及によって、治療受け入れ機関が増加している。そのため、アルコール依存の治療プログラムを開発することで、適切な治療の提供を促すことが可能と考えられる。また、アルコール依存の治療経験がある医療スタッフは日本においては少数であるため、医療スタッフにとってユーザビリティの高い治療プログラムが開発されれば、医療スタッフが治療を担いやすいと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、以下の 3 つの目的がある。

- (1) アルコール依存症の治療に特化した、医療スタッフにとってユーザビリティの高い簡便な治療プログラムを開発する。
- (2) 非無作為化比較試験を用いて、日本における標準的なアルコール依存の治療プログラムと本研究で開発した治療プログラムの効果を比較し、治療効果を検証する
- (3) 同一医療機関内の医療スタッフと比較して、治療プログラムに参加したスタッフがアルコール依存症に対する態度を変化させるか検証する。

3. 研究の方法

(1) ユーザビリティの高い治療プログラムの開発

1 クール 10 回の治療プログラム (Restart and Enhancing Life Intervention For Every person with Alcohol Addiction: RELIFE-A²) とワークブックを開発し、ユーザビリティを検討する。RELIFE-A² は、「心理教育」「ストレス対処スキルの獲得 (コーピングスキル訓練)」「社会資源の活用」「価値に沿った行動の実施 (価値の明確化とポジティブ心理学的介入)」の 4 つのコンポーネントで構成された。認知行動療法やコーピングスキル訓練のマニュアルを参考として、ハームリダクション (断酒を目的とせず酒害を最小化する治療戦略) を取り入れた。また、治療プログラムの開発には開発者の許可を得た上で、薬物依存の治療プログラムである Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program (SMARPP) を参考とした。RELIFE-A² では、毎回のテキスト輪読とエクササイズを実施し、1 回 60 分から 90 分の集団介入とした。

ユーザビリティの検討は、2 段階で行った。第一段階では、依存症治療の経験が 10 年以上の医師及び精神保健福祉士 3 名に内容を確認してもらい、治療効果が期待できるか、内容は適切か、患者は理解可能か、依存症治療未経験のスタッフが実施できるか、の 4 点について評価してもらい、エキスパートコンセンサスを得た。

第二段階では、エキスパートコンセンサスを得た上で、依存症の治療経験が 3 年未満の医療スタッフ 12 名に RELIFE-A² のワークブックを確認してもらい、理解し易さ、患者への説明し易さ、実施できると思うかどうかの 3 点について 5 段階評価で評価してもらった。第一段階、第二段階共に、平均得点が 4.0 点以上をもって、ユーザビリティが高いと判断した。

(2) 治療プログラムの効果の検証

3 群比較の非無作為化比較試験を行った。研究協力者は地方民間医療機関に入院治療したアルコール依存症患者 36 名であり、以下の 3 群にて介入を行った。対象群 1 は、RELIFE-A² を依存症治療歴が 5 年以上のスタッフが行った。対象群 2 は、RELIFE-A² を依存症治療経験がないスタッフが行った。統制群では、日本の標準的なアルコール依存の治療プログラムである GTMACK のワークブックを使用した。

(3) 治療に参加したスタッフが依存症に対する態度を変化させるかの検証

RELIFE-A² に参加したスタッフと、参加しなかったスタッフの間で、アルコール依存症に対する態度に変化がみられるか、検証した。RELIFE-A² 参加の前後 1 年における依存症に対する態度を質問紙 (Alcohol Problems Perception Questionnaire: AAPPQ) を用いて測定した。統制群として、同一医療機関に所属する RELIFE-A² に参加しなかったスタッフに、1 年の間隔を空けて AAPPQ を測定した。

4. 研究成果

(1) 治療プログラムのユーザビリティ

依存症治療経験が長い専門家からの評価では、4つの項目全てにおいて、基準点である4.0以上となったため、エキスパートコンセンサスを得られたと判断された。平均得点は、治療効果が期待できるかが4.3点、内容は適切かが5.0点、患者は理解可能かが4.6点、依存症治療未経験のスタッフが実施できるかが4.6点であった。

次に、依存症治療の経験が少ないスタッフからの評価でも、3つの項目全てにおいて、基準点である4.0以上となった。平均点は、理解し易さが4.8点、患者への説明し易さが4.6点、実施できると思うかが4.6点であった。以上の結果から、本研究で開発したアルコール依存症の治療プログラムであるRELIFE-A²は、ユーザビリティが高いと判断された。

(2) 治療プログラムの効果検証

本研究デザインは非劣性試験であり、既存の標準的なアルコール依存症の治療用ワークブックであるGTMACKと比較して、本研究で開発したRELIFE-A²が同等の治療効果を有するか検証するものである。測定は治療開始前と治療後の2時点で行った。アウトカム指標は禁酒に対する自己効力感、再飲酒リスク(Alcohol Relapse Risk Scale: ARRS)、コーピングスキル(Tri-axial Coping Scale 24: TACK-24)、心理的ウェルビーイング(Psychological Well-Being Scale: PWBS; 岩野ら, 2015)を用いた。治療前後の変化量を従属変数、群を独立変数とする分散分析を行った結果、自己効力感において、RELIFE-A²を用いた介入群1と介入群2の2群が統制群よりも得点が高くなっていった($F=5.27, p=.01$)。多重比較の結果、介入群1および介入群2は、統制群よりも自己効力感の変化が大きかった。介入群1と介入群2の間には、有意な差は認められなかった(図1)。また介入群の間ではその他の測定指標では、群間に有意差は認められなかった。

以上の結果から、RELIFE-A²は既存のアルコール依存症の治療プログラムと同等の治療効果を有し、かつ自己効力感に関しては従来の治療よりも治療効果が高いと判断された。さらに、実施においては依存症治療の経験が無いものでも、5年以上の治療経験がある者が使用した際と同等の治療効果があることが示された。

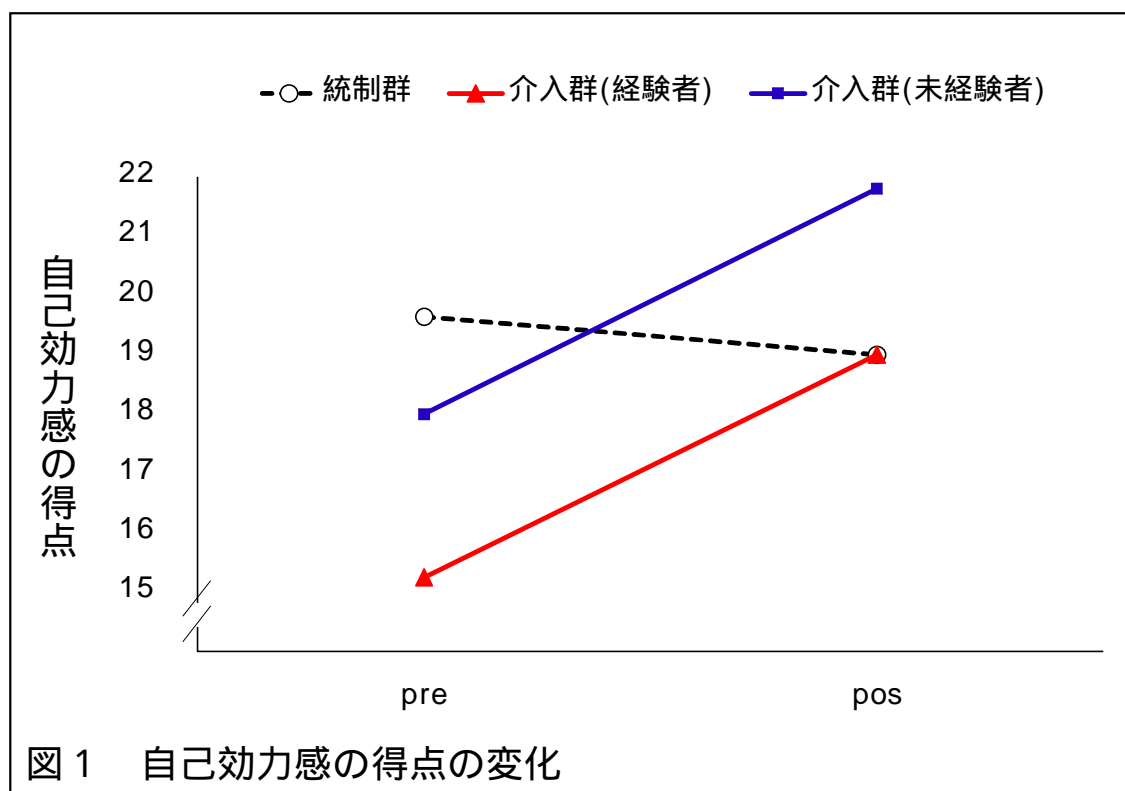


図1 自己効力感の得点の変化

(3) 治療に参加したスタッフの変化

RELIFE-A²に参加したスタッフ(参加群)と参加しなかったスタッフ(統制群)の1年間のAAPPQ得点の変化量を従属変数とするt検定を行った。その結果、参加群の得点の変化は統制群よりも有意に大きかった($t=2.82, p=.03$)。そのため、RELIFE-A²に参加することで、医療スタッフのアルコール依存症に対する態度が良い方向に変化するものと考えられた(図2)。ただし、参加群は5名、統制群は7名であった。

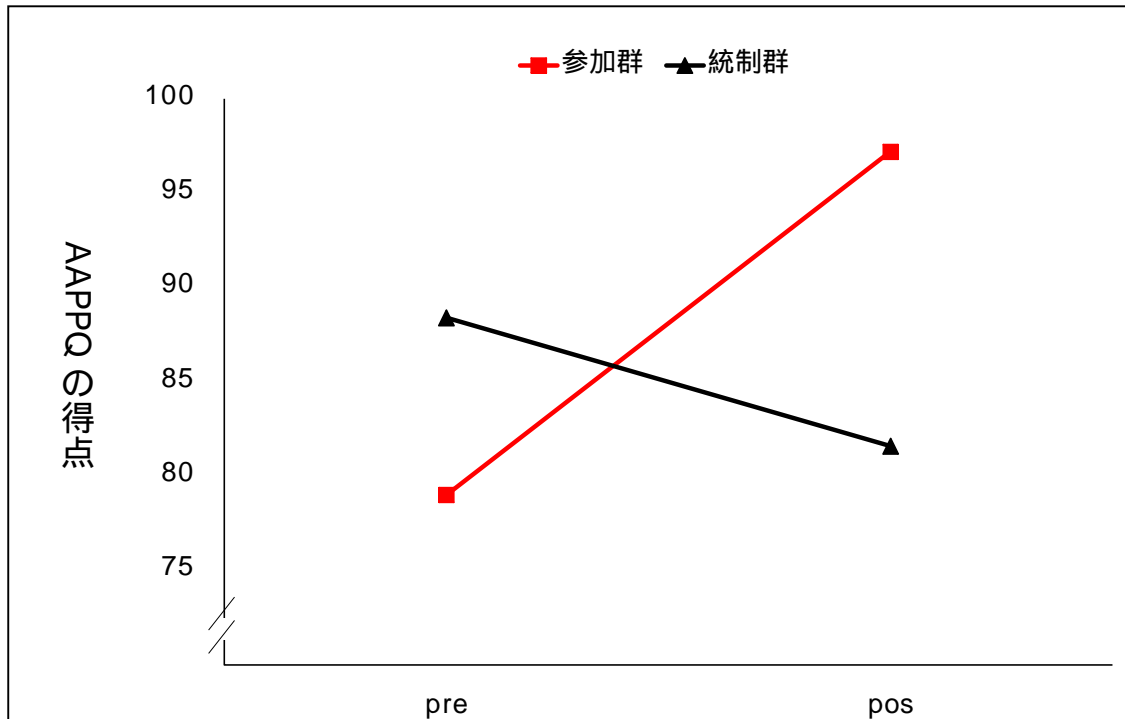


図2 アルコール依存症者に対する態度の変化

まとめ

以上の結果から、本研究において開発したアルコール依存症のための治療プログラム RELIFE-A² は、日本の標準的な治療と同等の治療効果を有することが明らかとなった。そして、依存症治療の経験が無いスタッフが実施した場合であっても、専門家が実施した場合と同等の治療が提供できることが明らかになった。RELIFE-A² は高いユーザビリティが本研究において確認され、さらに参加した医療スタッフの依存症に対する態度が良好に変化することも示された。これらの結果から、RELIFE-A² は依存症治療の経験が少ない医療スタッフが高品質の治療を提供するために有効なツールであると判断された。

<引用文献>

岩野卓・新川広樹・青木俊太郎・門田竜乃輔・堀内聡・坂野雄二 (2015). 心理的ウェルビーイング尺度短縮版の開発 行動科学, 54(1), 9-21.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩野 卓・堀内 聡・高橋 陽介	4. 巻 10
2. 論文標題 アルコール依存症者のコーピングスキルが気分状態に与える影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 認知療法研究	6. 最初と最後の頁 202-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩野 卓・橋本 省吾	4. 巻 19
2. 論文標題 アルコール依存を合併する成人期の自閉スペクトラム症者の心理学的特徴	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本アルコール関連問題学会雑誌	6. 最初と最後の頁 117-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩野 卓・堀内 聡	4. 巻 57
2. 論文標題 日本における依存症治療の変貌	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 行動科学	6. 最初と最後の頁 123-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 岩野卓
2. 発表標題 アルコール依存症治療プログラム参加によるコ・メディカルスタッフの態度変容の試み
3. 学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩野卓, 鶴岡敏伎, 安見雅子, 高尾美希, 帆秋伸彦
2. 発表標題 入院時のアルコール依存症者の特徴と治療脱落の関係
3. 学会等名 第71回九州精神神経学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安見雅子, 岩野卓, 鶴岡敏伎, 高尾美希, 帆秋伸彦
2. 発表標題 アルコール用集団認知行動療法のユーザビリティの検討: RELIFE-A2プログラムの開発
3. 学会等名 第40回日本アルコール関連問題学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鶴岡敏伎, 岩野卓, 安見雅子, 高尾美希, 帆秋伸彦
2. 発表標題 アルコール依存症患者の入院形態による動機づけの差異について
3. 学会等名 第40回日本アルコール関連問題学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩野卓
2. 発表標題 アディクション治療の難しさをトラウマから考える
3. 学会等名 第17回日本トラウマティック・ストレス学会シンポジウムC「アディクションとトラウマの関連を基礎研究から実践活動で考える」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩野卓
2. 発表標題 依存症の集団認知行動療法
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第44回大会自主企画シンポジウム2「認知行動療法を「集団」で実施することはクライアントにどのような利益をもたらすか？」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩野卓, 安見雅子, 鈴木沙織, 鶴岡敏伎, 帆秋伸彦
2. 発表標題 アルコール依存症患者と健常者の心理的ウェルビーイングの比較
3. 学会等名 第39回日本アルコール関連問題学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩野卓・高尾美希・鶴岡敏伎・安見雅子・帆秋伸彦
2. 発表標題 ハームリダクションに基づく認知行動療法プログラムの開発
3. 学会等名 第41回日本アルコール関連問題学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iwano, S., Tsuruoka, T., Yasumi, M., Takao, M., & Hoaki, N.
2. 発表標題 The pilot study of cognitive behavioral and positive psychological intervention for alcohol addiction.
3. 学会等名 9th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

大分大学岩野研究室
<https://sites.google.com/view/iwanolab/top>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----